

第三十四回 齋藤茂吉短歌文学賞

佐藤通雅『岸边』

角川文化振興財団

選考委員

委員長 永田和宏

委員 小池光

小島ゆかり

三枝昂之

【贈呈式】

令和五年五月十四日（日）

（五十音順）

佐藤 通雅 『岸边』 (自選)

ビニール袋拾いあぐれば宇宙人の胎児のやうなイヌの糞なり

岸边にはなにか聖書の感じあり帽とり額に水の光当つ

黄金の銀杏の道を渡るなりとりかへしつかざることとはたれにも

街に出て手負ひの鳥のごとくにも小公園のベンチにゐたり

老いゆくは抽象へ向かふことならむこの頃哲学書が次々解ける

一日の食に足らひてもどり来し夕の白鳥のつばさは透くも

完膚なきまでに敗れしものとして草踏む倒木の根のところまで

何本もの氷柱に滴ふくらみてこぼれむときその尖は震へる

騒乱のあり崩壊もありながら雨止み草の穂の立ち直る

逃げ場無き人静けくてマイバッグ出せば手早く物入れくるる

● 選考委員による選評

現在進行形の記憶

永田 和宏

佐藤通雅氏は、仙台という自分の基盤にしっかりと根を張り、そこから歌壇の流れを常に客観的、批判的に観察し、メッセージを発し続ける姿勢に、強い印象を受けて来た。宮沢賢治の研究者としての多くの業績もさることながら、なにより一九六六年から五五年一五〇号にわたって続けられた個人誌『路上』の発行は、佐藤通雅を語るうえで外すことのできない要素であろう。歌人として他に例をみない、特筆すべき活動である。

本歌集は、東日本大震災を今なお現在進行形の記憶として抱え続ける真摯な歌群のほかに、自身の老いや病いを詠った作品が印象に残る。それらが従来よりいくぶん自在さを増した文体で、ある種軽みとともに詠われるようになったのが特徴であろうか。佐藤通雅の受賞を古い友人として心から喜んでいる。

短歌への「愛」

小池 光

佐藤通雅氏は、一時期を除いて、短歌結社に所属せず、個人誌『路上』を発行し、そこを表現の拠点としてきた。五十数年にわたり『路上』の刊行は続けられ、このたび百五十号をもって終刊となった。これだけの年月を続いた個人誌をほかに知らない。内容も児童文学、教育論、そして短歌の評論と実作とはなはだ多岐、多彩にわたり、小さな総合誌のおもむきをみせるユニークな本であった。

その多彩さのなかの一番の根底に、常に短歌があった。そのことを得難くおもう。『岸边』はその十二番目の歌集で、日常のちいさな出来事を独特の視点からすくい上げ、滋味ぶかい歌集になっている。短歌への「愛」がしみじみ感じられる好歌集である。

岸辺に立ち尽くす人

小島 ゆかり

期間限定安売り墓地の広告を二日とりおき三日目に捨つ

岸辺にはなにか聖書の感じあり帽とり額に水の光当つ

勝訴とは、何に勝つたといふことだらう 立ち尽くすわれ、コスモスの花も

長く一人であつてきた歌人が、いま改めて歳月の岸辺に一人立ち尽くすような作品群と思ひました。

暮しの中の、ささやかな心理の起伏ににじむもの。

世の猥雑をふいにすり抜けて恩寵のようにやって来るもの。東日本大震災とその後の葛藤がもたらしたもの。わからないものだらけの岸辺に立ちながら、ところどころ、まだまだこの世をおもしろがる表情が見えて、ゆたかな読後感を味わいました。

おめでとうございます。

独り歩みつづける

三枝 昂之

東北に根を下ろして独行的な歩みを続ける佐藤通雅氏を常に意識しながら私は活動してきた。1966年に個人編集誌「路上」を創刊して2021年まで続けたその持続力は、佐藤氏の高い文学的倫理性を明かしている。その阿ることのない姿勢に裏打ちされた時代との向き合い方が今回の『岸辺』でも手応え確かに発揮され、大切な成果となった。

その一端を2020年の「勝訴」一連に見ておきたい。石巻市の大川小学校の悲劇は東日本大震災の痛恨事の一つだが、学校の対応を巡って遺族側が訴訟を起こした。

勝訴とは、何に勝つたといふことだらう

立ち尽くすわれ、コスモスの花も

言うてはならぬゆゑ口閉ざすはたれもたれも

海行きの電車がいま発つ

一連はあの渦中におけるさまざまな真摯が勝ちと敗けに分けられる事象を行き所のない憂慮をこめて凝視している。終わることのない震災を追い続ける佐藤氏ならではの一連だろう。その佐藤氏の歌集『岸辺』の斎藤茂吉短歌文学賞受賞を喜びたい。

受賞のことば

佐藤 通雅

私は、「座敷わらす」のような人だといわれてきました。居るようで居ない、居ないようで居るという在り方をしてきたからです。表現の場も、個人編集誌「路上」が主のため、広く知られることもありません。それも、2021年7月に150号を出したところで終刊し、あとはごく私的に刊行しているばかりです。そういう私に、照明を当てて下さった関係者の皆様に感謝申しあげます。

東北に生まれ育った私にとって、齋藤茂吉は、いつでも大きな関心事でした。作品を朗読し、また歌集を書写し、魅力の核に迫ろうとしてきました。写生論の根拠にも迫ろうと、『茂吉覚書 評論を読む』としてまとめました。しかしまだまだ道半ば。気が付けば私自身の残り時間も、そう多くはありませんが、これまでどおり自分のペースで歌作し、また思索していきたいと思います。

本日は、ありがとうございました。



第34回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

佐藤 通雅 (さとう みちまさ)

歌人。1943年(昭和18年)岩手県生まれ 宮城県在住 80歳。
文学思想個人編集誌「路上」発行人、元河北新報歌壇選者。

【主な著作等】

歌集：昭和46年『薄明の谷』、昭和53年『水の涯』、
昭和57年『檻褸日乗』、昭和62年『アドレッセンス挽歌』、
平成6年『美童』、平成11年『天心』、平成15年『往還』、
平成18年『予感』、平成23年『強霜』、
平成25年『昔話(むがすこ)』、平成29年『連灯』、
令和4年『岸边』

著書：昭和45年『新美南吉童話論 自己放棄者の到達』、
昭和60年『日本児童文学の成立 序説』、
平成12年『宮沢賢治 東北砕石工場技師論』、
平成13年『岡井隆ノート『0』から『朝狩』まで』、
平成19年『賢治短歌へ』、平成21年『茂吉覚書 評論を読む』
他多数

受賞歴：昭和46年第4回日本児童文学者協会新人賞、
昭和61年日本児童文学学会賞奨励賞、
平成12年第10回宮沢賢治賞、
平成24年第27回詩歌文学館賞短歌部門

これまでの受賞者

第一回	岡井隆夫	『親和力』砂子屋書房
第二回	本林勝雄	『齋藤茂吉の研究—その生と表現—』桜楓社
第三回	塚本邦夫	『黄金律』花曜社
第四回	前登志夫	『鳥獸蟲魚』小澤書店
第五回	齋藤史美	『秋天瑠璃』不識書院
第六回	近藤芳次	『希求』砂子屋書房
第七回	小暮政次	『暫紅新集』短歌新聞社
第八回	馬場あき子	『飛種』短歌研究社
第九回	吉田漱	『白き山』全注釈』短歌新聞社
第十回	佐佐木幸綱	『呑牛』本阿弥書店
第十一回	伊藤博	『萬葉集釋注』集英社
第十二回	森岡貞香	『夏至』砂子屋書房
第十三回	竹山広	『竹山広全歌集』雁書館・ながらみ書房
第十四回	藤岡武雄	『書簡にみる斎藤茂吉』短歌新聞社
第十五回	清水房雄	『獨孤意尚吟』不識書院
第十六回	小池光	『滴集』短歌研究社
第十七回	三枝昂之	『昭和短歌の精神史』本阿弥書店
第十八回	花山多佳子	『木香薔薇』砂子屋書房
第十九回	永田和宏	『後の日々』角川書店
第二十回	河野裕子	『母系』青磁社
第二十一回	伊藤一彦	『月の夜声』本阿弥書店
第二十二回	品田悦弘	『斎藤茂吉—あかあかと一本の道とほりたり—』ミネルヴァ書房
第二十三回	篠田四郎	『残すべき歌論—二十世紀の短歌論—』角川書店
第二十四回	秋葉京子	『茂吉幻の歌集』萬軍—戦争と斎藤茂吉—』岩波書店
第二十五回	栗木ゆかり	『水仙の章』砂子屋書房
第二十六回	小島ゆかり	『泥と青葉』青磁社
第二十七回	柏崎駿二	『北窓集』短歌研究社
第二十八回	橋本喜典	『行きて帰る』短歌研究社
第二十九回	大辻隆弘	『景德鎮』砂子屋書房
第三十回	春日真木子	『何の扉か』角川文化振興財団
第三十一回	吉川宏志	『石蓮花』書肆侃侃房
第三十二回	大島史洋	『どんぐり』現代短歌社
第三十三回	岡野弘彦	『岡野弘彦全歌集』青磁社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇—八五七〇

山形市松波二丁目八一— 山形県観光文化スポーツ部

文化スポーツ振興課内TEL・〇二三—六三〇—二九〇三